

平佐・苗代川・日木山 考古学資料から見た近世薩摩焼の技術交流（予察）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/14562

平佐・苗代川・日木山
—考古学資料から見た近世薩摩焼
の技術交流（予察）—

渡辺芳郎（鹿児島大学法文学部）

はじめに

近世薩摩焼⁽¹⁾は、朝鮮系製陶技術を基礎としながらも、肥前や瀬戸美濃、京焼など藩外からの技術を導入することで多様な製品を生産した（渡辺 2005）。それとともに、藩内各窯場間でもさまざまな技術交流があったことが、考古学資料・文献史料などからうかがいしれる。苗代川（日置市美山）の堂平窯において、17 世紀後半（堂平Ⅱ期）に、薩摩藩窯・堅野窯から白薩摩や匣鉢による窯詰め技法などが導入された可能性が推測されている（関・繁昌編 2006 p. 373）。また龍門司窯（加治木町）の陶工・川原芳工は、18 世紀後半、堅野窯場で修業したと伝えられ（「川原芳工履歴」⁽²⁾）、鹿児島市堅野稲荷窯跡では龍門司との共通性の高い製品が採集されている（渡辺 2004a）。さつま町（旧宮之城町）宮之城窯開窯にあたっては、堅野窯の「星山氏」が招かれており（渡辺 2002 など）、苗代川では 19 世紀中頃、色絵技術を堅野窯から導入したと伝えられている（「朴正官履歴」）。本稿で取り上げる平佐・苗代川・日木山の各窯場間でも、磁器製作技術を中心に活発な技術交流が存在したことが文献や石碑銘文などから確認できる（渡辺 2003, 以下「前稿」と略称）。

これまでこれらの技術交流は、主として窯跡に残る石塔銘文や文献史料等から推測されていたが、近年、窯跡の調査が進み、窯道具などの考古学資料からも、その技術交流を考えることが可能になりつつある。本稿に関連するものとしては、加治木町日木山窯跡（関編 2005）、薩摩川内市平佐焼新窯跡（前編 2006）、同大窯跡（渡辺 2007）などの発掘調査が実施され、また苗代川における窯跡採集資料なども報告されるよう

になってきている（出口 2002, 関・前田 2006, 渡辺 2008・2009 など）。また前稿ではもっぱら磁器窯のみを取り上げていたが、その後、陶器窯と磁器窯との関係についても検討する必要性を認識した（渡辺 2007 pp. 115-117）。

このような調査研究の展開を踏まえ、本稿では、平佐焼、苗代川、日木山窯という 3 つの窯場の技術交流について、文献史料等と考古学資料から検討する。ただし後述するように、同時期の技術交流の鍵となる苗代川南京皿山窯跡が未発掘であるため、多分に予察を含むことをお断りしておきたい。

また文献史料等から推測される技術交流が、当時の技術交流のすべてとは限らない。むしろ考古学資料から文献には残っていない技術交流を推測・復元することも重要であり、両者を総合して議論すべき課題である。とくに生産技術に関わる窯道具などの共通性は、模倣可能な製品のそれと異なり、陶工の移動も含む、窯場間の技術交流を考える上で重要な手がかりとなる。本稿では、文献史料等に現れた技術交流と考古学資料（窯道具）との関係について検討するとともに、考古学資料のみから推測される技術交流についても言及したい。

1 文献史料等に見られる技術交流

まず前稿を踏まえ、文献史料等から推測される平佐・苗代川・日木山間にあったであろう技術交流について整理する（Figure 1, 以下文中の○数字は Figure 1 と一致）。

①苗代川・百姓陶工の平佐への移住（苗代川陶器→平佐磁器）

平佐焼窯場は安永年間（1772-81）に開窯したと考えられるが、同窯跡群に残る文化元年・七年（1804・10）銘石塔にそれぞれ「白慶石」「白慶碩」（同一人物か）の名前が刻まれている。また窯跡近傍の皿山墓地には百姓の墓石があり、今のところ享和 2 年（1802）から

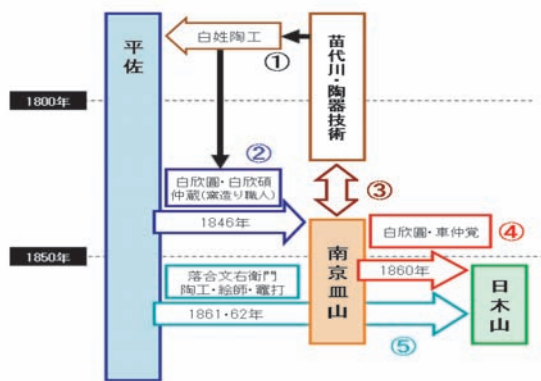


Figure 1 平佐・苗代川・日木山窯間の技術交流
(○数字は本文第1章内の○数字に対応)

天保7年(1836)銘の墓石6基が確認されている。その墓石の年代から、平佐焼操業の初期段階から苗代川の白姓陶工が数世代にわたって関与していた可能性が指摘されている(小島 2000 p. 39)。

白姓陶工の平佐移住がいつ始まったのかを厳密に特定する資料は現段階ではないが、少なくとも18世紀後半ないしは19世紀初頭に苗代川の陶器製作技術が平佐に導入された可能性が考えられる。

②南京皿山窯の開窯にともなう白姓陶工の呼び戻し(平佐磁器→苗代川磁器)

弘化3年(1846)、苗代川において磁器窯・南京皿山窯が開窯されるが、その際に平佐に代々居住していた白欣圓・白欣碩らが呼び戻され、「肥前伝焼物方主取」(肥前伝焼物=磁器, 主取=責任者)に任命されている。また築窯にあたっては、「平佐家来北郷次兵衛拘者 仲蔵」という「竈打ち調え方に取馴れ居り候者」が苗代川に呼ばれている(吉田・横井 1965 pp. 106-107)。このことは、すでに陶器用の連房式登窯があった苗代川においても、磁器窯を築くにあたっては、それとは別の築窯技術が必要であったことを示唆している(渡辺 2004b・2007 など)。

③南京皿山窯の操業(苗代川磁器←→苗代川陶器)

平佐からの技術導入により、苗代川で磁器生産が本格的に始まるが、言うまでもなく苗代川では、17世紀初頭以来の長い陶器製作技術の蓄積がある。それゆえ新しい磁器技術と在来の陶器技術との間でなんらかの技術交流があったことは十分に想像することができる(渡辺 2007 pp. 115-117)。ただしそのこと示唆する文献史料等は、今のところ管見に触れていない。考

古学資料については次章で改めて触れる。

④苗代川陶工の日木山窯への招致(苗代川磁器→日木山磁器)

加治木町日木山窯は、万延元年(1860)の開窯に際して、苗代川の白欣圓を招いていることが、新納仲之進の日記からわかる。また現在の龍門司窯場には「万延二」「車仲覚」銘の磁器製のロクロ軸受けが伝来しており、車姓の苗代川陶工が日木山窯に来ていたと推測される(関編 2005 pp. 68-73)。

⑤平佐陶工の日木山窯への招致(平佐磁器→日木山磁器)

苗代川陶工を招いて始まった日木山窯であるが、当初は十分な採算が取れず、文久元年(1861)、改めて平佐焼の主取・落合文右衛門と陶工・絵師各2名を招致し、さらに翌年に新しい窯を築く際には、平佐の実右衛門ら「竈打(窯造り職人)」5名を呼んでいる。苗代川陶工と平佐陶工は別々の工房で作業し、また賃金の支払い方法にも違いがあったという(関編 2005 pp. 68-73)。この違いは、苗代川陶工と平佐陶工の藩内における立場の違いに由来する可能性がある(渡辺 2007 p. 125)。

このうち①については、平佐焼で最初に開かれたとされる北郷窯および18世紀後半の苗代川の窯道具について十分にわかっていない。それゆえ次章の考古学資料からの検討は、①については保留し、②～⑤の技術交流について行いたい。

2 考古学資料から見た技術交流

前章で挙げた各窯場間の技術交流を考えるために、各窯跡から出土・採集されている窯道具を検討する。ただし薩摩磁器の製作技術は、広くは「肥前系」として括れるものであり、その基礎的な技術=窯道具は各窯跡で共通するものも多く、それらが技術交流の存在を直接的に示しているわけではない。ただし窯道具の中には、いくつか特徴的なものがある。それらは必ずしも薩摩独自の窯道具とは断定できないが、技術交流を考える重要な手がかりになると考えている。本章では、それらについて整理し、文献などで確認される技術交流との関連性について検討する。

(1) 切りハマ形センベイ (Figure 2-1-2)

切りハマ形センベイとは、直径20 cm前後の薄い磁土製円板を、ちょうどピザのように3～6分割したセ

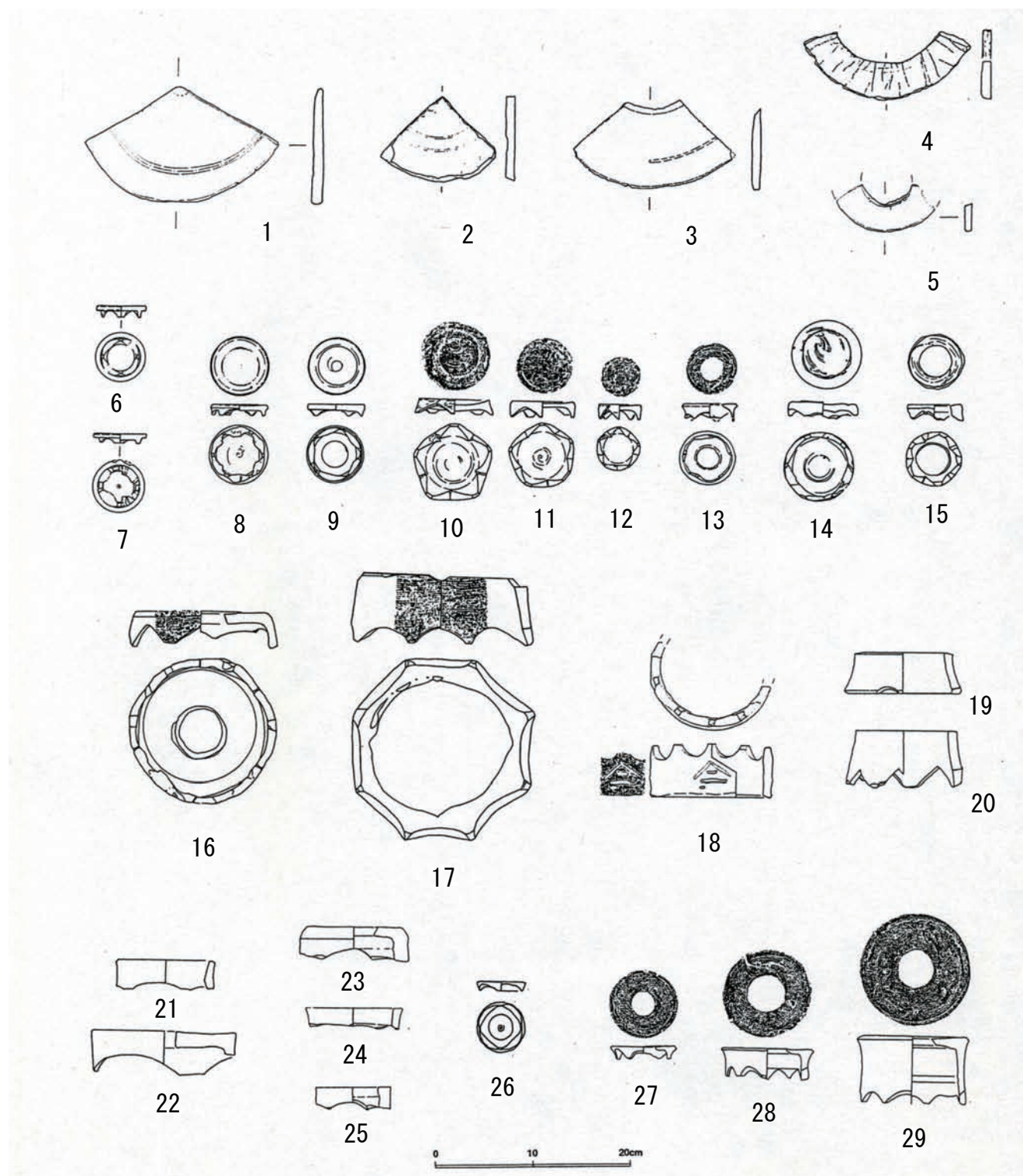


Figure 2 検討対象の窯道具 (S=1/6)

1: 平佐大窯跡 (渡辺 2007), 2: 日木山窯跡 (関編 2005), 3: 南京皿山窯跡 (採集) (渡辺 2007),
 4: 日木山窯跡 (同上), 5~7: 平佐大窯跡 (同上), 8~9: 日木山窯跡 (同上), 10~12: 南京皿山窯跡 (採集) (関
 2003), 13: 苗代川 A 08 地点 (採集) (渡辺 2008), 14~17: 雪山遺跡 (宮田他編 2003), 18: 苗代川 A 07 地点 (採集)
 (渡辺 2008), 19・20: 小代焼瀬上窯跡 (熊本) (坂本 1991), 21・22: 小峰窯跡 (宮崎) (堀田・柳田 2006), 23~
 25: 田香窯跡 (大分) (志満編 1998), 26: 智恵治窯跡 (長崎波佐見) (中野 2006), 27~29: 大西国右衛門窯跡 (栃
 木益子) (大川・大門編 1990)

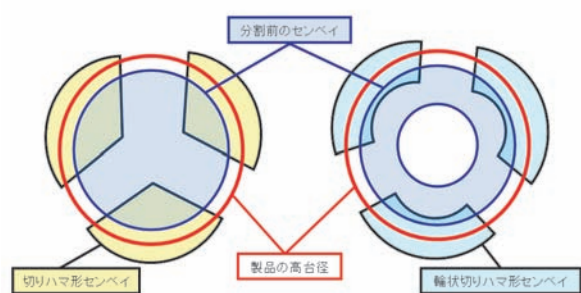


Figure 3 切りハマ形・輪状切りハマ形センベイ使用方法復元案

ンベイである。片面には復元直径が約 18 ～ 20 cm の高台痕が残る。つまり大皿や筒型花瓶などの大型品を置くためのセンベイであり、磁土節約のために分割したものと推測される (Figure 3)。平佐焼大窯跡 (渡辺 2007 p. 75) および日木山窯跡 (関編 2005 p. 34) で出土が確認されている。なお「切りハマ形センベイ」の名は、後述の「輪状切りハマ形センベイ」とともに日木山窯跡の報告書の命名による。

(2) 輪状切りハマ形センベイ (Figure 2-3～5)

輪状切りハマ形センベイとは、直径 20 cm 前後の磁土製円板の中央を円形に削り貫いたのちに 3 ～ 6 分割したものである。片面にはやはり復元直径 18 ～ 20 cm の高台痕が残ることから、前述の切りハマ形センベイと同様、大型品を置くための磁土を節約したセンベイと推測される (Figure 3)。本例は南京皿山窯跡 (採集) (渡辺 2007 p. 105) と日木山窯跡 (関編 2005 pp. 33-34) で確認されている。また平佐大窯跡では、やや小型ながら (推定直径約 11 cm)、やはり中央を円形にくり抜いた磁土製センベイが出土している (Figure 2-5)。ただし両端が欠損しているため、輪状切りハマ形センベイのように分割していたかどうかは不明であるが、磁土節約という点では共通する (渡辺 2007 p. 75)。

(3) 切高台付ハマ・ガンギ (Figure 2-6～17)

切高台付ハマとは、直径 5 cm 程度のハマの下面に高台を作りだし、その高台に挟りを入れて、4 ～ 6 個の脚を作りだした窯道具である。重ね焼きの際に製品と製品の間にはさむ。類似した窯道具に、加治木町弥勒窯跡の高台付ハマ (関編 2001 p. 31) と平佐焼新窯跡・大窯跡の足付ハマ (前編 2006 p. 31, 渡辺 2007 p. 74) があり、切高台付ハマは両者をミックスした形態と推測される。

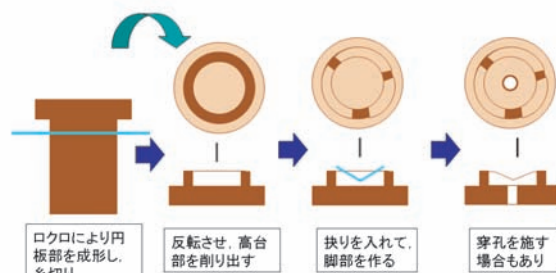


Figure 4 切高台付ハマ 1 類製作工程復元案

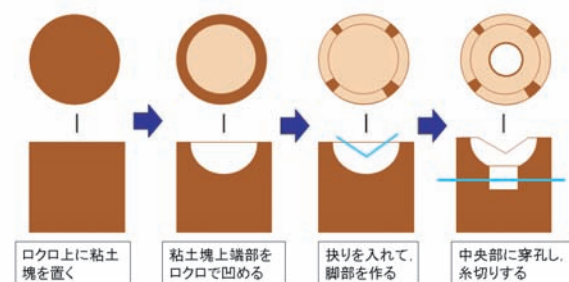


Figure 5 切高台付ハマ 2 類・ガンギ A 製作工程復元案

ところで切高台付ハマは、その属性により細分が可能であるが (渡辺 2007 p. 103)、ここではその製作技法と関係して大きく 1 類と 2 類とに分けて説明する。1 類はハマ上面に糸切り痕が見られないもので (Figure 2-6～9)、対して 2 類は糸切り痕が残されている (Figure 2-10～15)。1 類は、碗や皿などと同様、ロクロで成形したのち、高台部を削りだしたと推測されるのに対し (Figure 4)、2 類は、ロクロ上の粘土塊から高台状に脚部を引き出し、挟りを入れたのちに、糸切りで切り離したと考えられる (Figure 5)。1 類は平佐大窯と日木山窯跡で確認でき、2 類は南京皿山窯跡で採集されている。ただし日木山窯跡の 1 類の高台内面は、明らかに削り出しである平佐大窯例とはやや異なり、湾曲している。必ずしも削りではない可能性もあり、2 類との共通性も見られる。

ところでこれら磁器窯跡の切高台付ハマは、いずれも磁土製であるが、苗代川では耐火粘土製の 2 類も採集されている。ひとつは五本松窯跡採集品である (関 2000)。五本松窯跡は、かつては 17 世紀中頃開窯とされていたが、近年、早くとも 18 世紀後半、19 世紀を中心に操業された窯ではないかと推測されている (関 2000・2003, 渡辺 2004b・2009)。もうひとつは苗代川窯跡群 A 08 地点 (単室登窯) で採集されている (Figure 2-13)。A 08 地点の窯の年代は 19 世紀代

と考えている。ただしA 08 地点には、隣接してA 07 地点の連房式登窯跡（明治末～昭和戦前期か）があり、物原も連続しているため、上記の切高台付ハマがA 08 地点に由来するかどうかは、厳密には断定できない（渡辺 2008）。

一方、苗代川で明治 20 ～ 30 年代に操業していた雪山之山窯の陶工の工房・住居跡と推測されている雪山遺跡からも切高台付ハマ 2 類が出土している。報告では美山での呼称を用いて「ガンギA」⁽³⁾ としている（Figure 2 - 14・15）。またガンギAよりも大型のガンギBと呼ばれる窯道具も出土している（Figure 2 - 16・17）。ガンギAには磁土製と耐火粘土製の両者があるが⁽⁴⁾、ガンギBはいずれも耐火粘土製である。ガンギBは、聞き取り調査により、甕や壺など大型陶器の重ね焼きの際に用いられたことがわかっている（宮田他編 2003 p. 102, pp. 140-141）。

雪山遺跡の報告書では、ガンギBはさらに穿孔を有する「底部」がつく B - 1（Figure 2-16）と、円筒状の B - 2（Figure 2-17）に細分されている（宮田他編 2003 p. 102）。苗代川A 07 地点採集のガンギB - 2（Figure 2-18, 渡辺 2008）の内面には粘土紐の接合痕が見られることから、次のような製作工程が推測される。つまり粘土円板上に粘土紐を積み上げ「胴部」を作成する。「口縁部」をヘラ状工具で抉りを入れたのち、同工具で「胴部」を切断する。切断された上部が B - 2 になる。一方、残った下部の「口縁部」にも抉りを入れ、「底部」を穿孔することで B - 1 ができる（Figure 6）。

以上、切高台付ハマ 1 類、2 類（ガンギA）、ガンギBの製作技法を推測してきた。その結果、切高台付

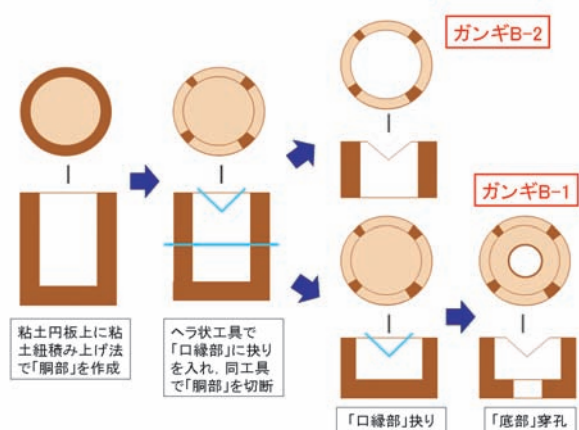


Figure 6 ガンギB製作工程復元案

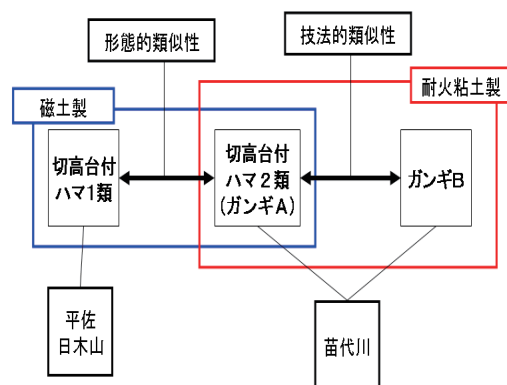


Figure 7 切高台付ハマ・ガンギの関係

ハマ 1 類と 2 類（ガンギA）は、形態的には類似するものの製作技法が異なり、後者はむしろガンギBのそれに近いと考えることができる。一方、1 類は今のところ磁土製のみであるのに対し、ガンギBは耐火粘土製のみ、2 類（ガンギA）は両者がある。さらに 1 類は平佐窯と日木山窯、2 類（ガンギA）・ガンギBは苗代川の磁器窯・陶器窯で使われていたことがわかる。以上を整理すると Figure 7 になる。

現在のところ、これらの各窯道具の先後関係については不明である。それゆえ切高台付ハマ 1 類が、2 類（ガンギA）やガンギBを産み出したのか、あるいは 1 類とガンギBとの折衷により 2 類（ガンギA）が登場したのか、などの関係はいくつか想像はされるが、特定はできない。しかしこれらが、平佐・苗代川・日木山窯の 3 ヶ所において、形態・製作技法・素材などを変えながらも密接な関係にある可能性が考えられ、磁器窯と陶器窯との間に何らかの技術交流があったことは十分に想定できることである。

ただし本稿ではもっぱら薩摩焼の窯跡資料を検討しているが、ガンギBは九州各地の近世窯跡に見られることが指摘されている（Figure 2 - 19 ～ 25, 堀田・柳田 2006 pp. 151-152）。また切高台付ハマ 2 類も長崎県波佐見地方にもあり（Figure 2 - 26, 中野 2006 p. 20）、さらに栃木県益子で明治前期に操業した大西国右衛門窯などでも用いられている（Figure 2 - 27 ～ 29, 大川・大門編 1990 pp. 41-43）。それゆえこれらの窯道具の系譜関係は、より広い視野でとらえる必要があり、今後の課題としたい。

以上の窯道具について、文献等に現れた技術交流との関係を整理すると Table 1 および Figure 8 になる。

窯道具	窯場	平佐	南京 皿山	苗代川 陶器窯	日木山	関係する 技術交流
切りハマ形センベイ		○			○	②④⑤
輪状切りハマ形センベイ		?	○		○	②④⑤
切高台付ハマ1類		○			○	②④⑤
切高台付ハマ2類(ガンギA)			○	○●		②③④
ガンギB				●		③

※○：磁土製、●：耐火粘土製

Table 1 窯場間の技術交流を示唆する窯道具

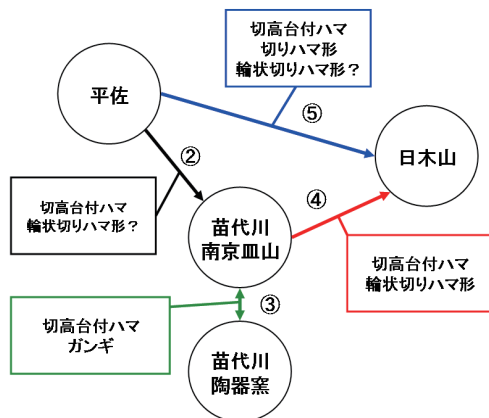


Figure 8 窯場間の技術交流と窯道具

おわりに

以上、石塔銘文や文献史料等で確認できる各窯場間の技術交流と、考古学資料としての窯道具を比較することで、後者が前者を支持し得る可能性があることを示した。また文献史料等では、今のところ確認できない磁器窯と陶器窯との技術交流についても、考古学資料からその存在の可能性を提示しえたと思う。

ただし本稿で扱った資料は採集資料も多く含み、とくに苗代川のような窯跡が多数分布する地域では、採集品の帰属窯、そしてその年代推定に問題が残ることは言うまでもない。なにより平佐と日木山とを結ぶ南京皿山窯跡が未調査であり、その具体相の把握は今後の課題である。本稿が「予察」と題した所以である。それゆえ今回示した「考古学資料から見た技術交流」の蓋然性については、今後の調査研究によって検証していかねばならない。

また冒頭でも述べたように、近世薩摩焼の窯場間ではさまざまな技術交流が伝えられている。今回検討した平佐・苗代川・日木山の技術交流も、それらの一部として存在していたと考えられる。より全体的な具体相について、今後、考古学資料から検証していく必要がある。

謝辞

資料調査ならびに成稿にあたっては、多くの方々からご教示、ご協力を賜りました。文末にご芳名を記して謝意を表します。

鹿児島陶磁器研究会・鹿児島県立埋蔵文化財センター・関明恵・関一之・谷口晴子・堀田孝博・八木澤一郎（敬称略・五十音順）

註

(1) 近世薩摩焼とは「近世薩摩藩領（現在の鹿児島県全域と宮崎県南部）で生産された陶磁器の総称」として用いる。

(2) 「川原芳工履歴」は、後出の「朴正官履歴」とともに、明治18年の「繭絲織物陶漆器共進会 陶器功労者履歴」による（『薩陶製菟録』（鹿児島県立図書館蔵）所収）。
(3) 「ガンギ」とは「雁木」、つまり「雁の行列のようにギザギザの形をしたもの」（『広辞苑』）という意味からつけられたと推測されている（宮田他編 2003 p. 141）。

(4) 雪山遺跡出土の窯道具の多くは、雪之山窯に由来すると考えられるが、同窯が基本的に陶器窯であったと推測されることから、磁土製の切高台付ハマは、別の磁器を焼いた窯（南京皿山窯や御定式窯など）からの搬入・転用の可能性もある。

文献

- 大川清・大門直樹編 1990『益子の近代陶業遺跡』国士舘大学文学部考古学研究室
小島早智子 2000「平佐焼の展開」『用と美－平佐焼の世界』展図録 pp. 38-41 川内市歴史資料館
坂本重義他編 1991『小代焼瀬上窯跡・瓶焼窯跡』南関町
志満紀郎編 1998『田香焼窯跡』大任町教育委員会
前幸男編 2006『平佐新窯跡』薩摩川内市教育委員会
関明恵・繁昌正幸編 2006『堂平窯跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター
関一之 2000「五本松窯跡採集資料」『からから』6
関一之 2003「切高台付ハマ」と呼ばれる窯道具について『からから』15 pp. 5-14
関一之編 2001『弥勒窯跡』加治木町教育委員会
関一之編 2005『日木山窯跡』加治木町教育委員会
関一之・前田順子 2006「日置市（旧東市来町）美山

地区窯平採集の資料について」『からから』21 pp. 1-28

出口浩二 2002 「苗代川南京皿山小考」『からから』12 pp. 5-10

中野雄二 2006 「江戸後期における波佐見諸窯と長与皿山窯の磁器生産」『江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通－第16回九州近世陶磁学会資料集』pp. 2-23 九州近世陶磁学会

堀田孝博・柳田晴子 2006 「小峰焼の考古学的再検討」『宮崎考古』20号 pp. 125-160

宮田洋一・関明恵・三垣恵一編 2003 『雪山遺跡・猿引遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター

吉田光邦・横井清 1965 「秘められた焼もの職人史－薩摩苗代川文書5」『日本美術工芸』327 pp. 104-107

渡辺芳郎 2002 「薩摩焼窯神石塔2例」『鹿大史学』49号 pp. 17-29

渡辺芳郎 2003 「近世鹿児島における磁器窯場間の技術交流」『鹿児島大学法文学部紀要 人文学科論集』57 pp. 89-106

渡辺芳郎 2004a 「豎野稻荷窯跡採集資料」『鹿大史学』51号 pp. 35-49

渡辺芳郎 2004b 「近世薩摩焼の窯構造」『金沢大学考古学研究室紀要』27 pp. 39-49

渡辺芳郎 2005 「16～17世紀の薩摩焼の技術」『16・17世紀における九州陶磁をめぐる技術交流－第15回九州近世陶磁学会資料集』pp. 109-146 九州近世陶磁学会

渡辺芳郎 2007 『薩摩川内市平佐焼窯跡群の考古学的研究』鹿児島大学法文学部人文学科異文化交流論研究室

渡辺芳郎 2008 「日置市美山・苗代川窯跡群測量調査報告－A07・A08地点－」『鹿大史学』55 pp. 39-58

渡辺芳郎 2009 「日置市美山・苗代川窯跡群測量調査報告－A03地点（五本松窯跡）－」『鹿大史学』56（印刷中）

(e-mail:watanabe@leh.kagoshima-u.ac.jp)